

題目 神なき時代の黙示録 — 劇画『ナウシカ』の終末論

発表者 十津 守宏

劇画『風の谷のナウシカ』は、1982年から1994年にかけて、宮崎駿により書き上げられたものである。アニメ映画『風の谷のナウシカ』（1984年）が、救済者としての主人公ナウシカの贖罪死による救済神話と解釈出来るのに対して、劇画『風の谷のナウシカ』では、その救済神話を解体するという方向性が与えられている。この転換については、既に稲葉振一郎『ナウシカ解説——ユートピアの臨界』において、作品が書かれた時期と並行する冷戦体制の崩壊などの歴史的現実と照らし合わせながら、ユートピア思想の限界を示唆するものとして論じられている。それに対して今回の発表では、その転換を、作品中にみられる歴史神学的思考と汎神論的世界観の対立を手がかりとしながら論じたい。

劇画『風の谷のナウシカ』の舞台もアニメ映画と同じ最終戦争後に発生した有毒の瘴気を発する「腐海」とそこに住む「蟲」という攻撃的な生態系に人類が生存を脅かされている世界であり、そこには伝説の「青き清浄の地」にまつわる救済神話が流布している。しかし、その救済神話の本質とは、アニメ映画のような自然の自浄作用に基づくものではなく、人為的に計画されたものである。その浄化の計画は「腐海がその役目を終えたときは（旧世界の人類も）共に滅びる」という滅亡と「（世界が回復した時に）おだやかな種族として新たな世界の一部となる（新たな人類）」という再生の構図からなる終末論的色彩を帯びている。即ち、旧世界の滅亡とともに再生する新世界の二元論からなる終末論であって、歴史の目的の内在的完成ではなく歴史の溯行について語る黙示録的なそれなのである。黙示録とは、その起源が古代イスラエルの歴史的破局と関係付けられているように、歴史的な絶望から希望が超歴史的かつ彼岸的なものへと高められたものである。この作品の終末論が、その黙示録的色彩を帯びていることは、世紀末としての現在の歴史的現実と関係付けられよう。しかし、結末におけるその黙示録的終末論としての救済神話の解体の原因を我々が経験した歴史的現実を求めるという解釈は不十分である。

むしろ、この救済神話の解体と深く関わるのは、「目的のある生態系、その存在そのものが生命の本来にそぐいません」というような歴史神学的思考と汎神論的世界観の対立である。歴史を終末論的完成、或いは終焉への統一として目的論的に把握する西洋の歴史神学的思考は、世界を永遠回帰の調和したコスモスとして考える東洋的汎神論の対極にある。ナウシカは、「私達の神は一枚の葉や一匹の蟲にすら宿っている」と述べ、東洋的汎神論への歩みよりを示す。それは、最後に呈示される「生きましよう。全てをこの星に託して」という生命全体の生への意志を無条件に肯定する。そして、この歩みは、この作品のアニメ映画とは異なる結末への転換を歴史的現実の映し絵として読み解く以上に、よりよい説明となるものなのである。